幼馴染

kerube

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼馴染

【Ｎコード】
Ｎ７２１５Ｊ

【作者名】
ｋｅｒｕｂｅ

【あらすじ】
両想いだけどお互いに気づいてない幼馴染の話

一話

俺は有山修也。
俺には、好きな人がいる。
でもその人は、俺の気持ちに全然気づいてないし、
しかも仲悪くなってた時期もある。
そのあとから俺がその人を好きになった。
「修～也くん。」
おっと説明してたらやって来た。
正に噂をすればなんとやら。
「修也くん？」
「あっよっ。」
「どうしたの？最近ボーッとしてるけど？」
ギクッ！
「あ…あっ！いや何でもないよ！！」
今話しかけて来たのはさっき話してた俺の好きな人。
名前は谷無有紗。
「ふーん。まあいいや。」
あぶねー！
有紗のこと考えてるなんて死んでも言えねーよ。
「そ…そうだよ気にすんなよ。」
「まさか好きな人でもいるの？」
うん俺の目の前にねなんて言えないので、
「い…いねーよ。」
と答える。

「ふーん。まあ修也くんに好きな人がいたら…嫌だけど。」
なんか恥ずかしそうにいってるけど俺には聞き取れなかった。
「ん？なんか言った？」

「いや何も言ってないよ。さ、早く教室入ろ！」
「お…おう」
なんかごまかされたけどいいや。
答えたくない物をあえて聞く必要はないからな。

二話

放課後まあ毎日だから当たり前ちゃ当たり前だけど有紗から一緒に下校のお誘いがかかった。
下校中俺は何気なく。
「そういえばさ有紗って好きな男子いるのか？」
「えっ！？い…いきなり何？」
「い…いやちょっと気になったからさ。」
「い…いるよ？」
いるのか…
俺は内心ショックを受けた。
「しゅ…修也くんこそどうなの？」
「いるに決まってんじゃん。」
「そうなんだ・・・」
なんか有紗もショック受けてる？
うーんこういうときに「俺の好きな人は有紗だ」って言えたらどんだけ楽だろうか…
で…でも俺にはそんな勇気ねー！
「ごめんね有紗」
「何が？」
「こういう質問して」
「うんいいよ。だって私の好きなのは修也くんだから」
小声で何か後半言ってるけど聞き取れなかった
「なんか言った？」
「う…ううん何でもないよ！」
「そう？」
「うん。あっ！ちょっと寄り道しない？」
「いいよー。」
そう言って連れてこられたのは商店街と思いきや人気のない公園だ

った。
「どうしたの？こんなところに来て。」
「ううん特に理由はないよ。」
「ふーん。」
あたりがシーンとなった
お互いに沈黙で
有紗はなんか知らんけどそっぽ向いている
聞こえるのはカラスの鳴く声と
風の音だけ・・・って
何この気まずい雰囲気は！？
「「あの！」」
声が重なった
「有紗から言っていいよ。」
「修也くんから言っていいよ。」
「…ってもうこんな時間だ。」
「帰ろっか。」
「そだな。」
しばらくして家が反対なので、そこで解散した。
それまでは2人とも何も話さずいや2人とも話せないほど照れていた。
何でだろ今まではこんなこと無かったのに…

三話

俺は八城彰太。
今日はおかしなことが起きている。
いつも一緒に登校してくる修也と有紗ちゃんが今日は別々に登校してきた。
しかも2人とも口を聞いてない。
・・・というかお互いに相手が気づいてない時に、相手の顔を見てて、気付かれそうになると、慌てて顔を背ける。
「修也。昨日有紗ちゃんと何かあった？」
俺は有紗ちゃんに聞こえないように訪ねてみる。
「実は…」
「なんだよそういうことかよ。」
「そういうことってなんだよ。悪いかよ。」
「悪くはないが、自分がショック受けることを考えれば、聞かなくてすんだな。」
「ああ…」
有紗ちゃんも同じことを言っていた。
しかもお互いに相手が自分のことが好きだとは気づいてなかった。
だけど俺がばらすつもりはない。
なぜなら自分で気がつくほうが大事だと思うから。
俺は　ただの傍観者だからな。

四話

私は七条愛花。
なんか昨日までは仲良かったのに修也くんと有紗の仲が悪くなっている。
私はそれを見守ることしかできない。
ある時修也くんが行動を起こした。
「修也くんから呼び出しかかったんだけどなんだろ？」
あー有紗もきづいてないんだと私は思った。
「一応行ってあげたら？」
「そだね。」
たぶん修也くんは有紗に告白するつもりだ。
「おめでとう。」
わたしは有紗にそう言った。
「何が？」
「ううん。なんでもないよ。」
きっとその時になれば分かるから、あえて今はその意味を教えない。
そして彰太くんに昨日何があったかを教えてもらった。
「修也くん彰太くんには相談できるんだね。」
「有紗ちゃんから聞いてなかったのか？」
「うん。」
「そうなんだ。」
「まあ修也を責めないでやってくれ。」
「分かった。」

五話

「有紗・・・ごめん。」
「ん？」
「昨日のこと・・・」
「あーあのことね。まぁいいよ。」
おれは有紗に謝った。
「お詫びっちゃあなんだけどその・・・今日喫茶店に行かない？」
「そ・・・それってデートの約束？」
有紗が照れながら答えるもんだから、俺も照れてしまった。
「ち・・・違う！・・・よ。」
「違う・・んだ・・」
「ちがくもないけど違うよ。」
「そうなんだ・・・うん！分かった。」
よかった有紗の機嫌が直ったみたいだ。
でも・・・まだ告白するには早いよな・・・
有紗ってそんなに人気じゃないっぽいからまだ大丈夫だよな。

六話

放課後俺は有紗と喫茶店に行った。
そこで俺はコーヒーを、有紗はクリームソーダを飲みながら無駄話をしていた。
「あっ！有紗大事な話があるんだけど・・・」
「ん？」
「俺・・・実は有紗の事好きなんだ・・・」
「え？」
有紗が焦っている。
「もし・・・良かったら俺と付き合ってくれないか？」
「えっ！？・・・ごめん・・・ちょっと今の状況がいきなりすぎて飲み込めないから今度で良い？」
「うん。返事はいつでも良いよ。この事をつたえたかっただけだから・・・」
今の状況が飲み込めない？
って事は有紗も？
いや変な期待はやめとこう。
とりあえず俺の気持ちは伝えた。
後は返事だけ。
「さ！帰ろっか！」
俺はコーヒーを飲み干し帰り支度をする。
「そだね！」
有紗・・・良い返事を待ってるからな。

七話

それはおとといのこと
「修也君あのね私転校することになっちゃった」
「え？」
「だから告白の返事は出来ないや。でもありがとう。」
「いつかまたあえるよな？」
「わからないけど・・・あえたら告白の返事ちゃんとするからね。」
「別に今でも・・・」
「転校するのに返事するなんて無責任でしょ？・・・だから・・・。」
「絶対だぞ？」
「うん。」
「もしまた会えたらまた告白するから・・・。」
「うん。」
ということがあって本当に有紗は転校してしまった。
俺の初恋は返事が返ってこないまま終わってしまったかと思っていた。
あのメールが来るまでは・・・。

第1部完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7215j/

幼馴染

2010年10月8日23時43分発行